

おじさんの青春日記

その6



黒川製菓

新しい年、幕開けの「おあいさつ」を申し上げます。

昨年、早春の二月。「おじさんの青春日記」ファンクラブ」メンバーによる「飛鳥 初詣の旅」が催行されました。

全国から奈良県橿原市・近鉄「橿原神宮前」駅に集まった一行二十五人。観光バスを貸し切つての飛鳥古跡巡礼の旅でした。

「プロフェッショナル」に登場の飛鳥のタクシードライバー、佐々田さんが先導する万葉歌を交えた名所ガイド、地元考古学者、内山ひろせ先生による考古学講話。

不況もなにもかも忘れて、日本の揺り籠ともいえる大和の地で古寺、遺蹟の静謐（せいひつ）のなかに浸りました。

飛鳥・奈良時代、中国大陸や朝鮮半島からたくさん渡来人が日本に移り住んだように、現代、約八十万人の日本人が海外に渡り、世界のすみずみに居住しています。

傷ましいニューヨーク同時テロ事件でも多くの日本人犠牲者の名前があげられました。さまざまな目的で祖国を遠く離れて生活している日本人が想像以上に多いことを、今回の事件はあらためて教えてくれます。

今回の「おじさんの青春日記 その6」。キーワードは「世界」。

私たちは古来、海の彼方の異国をあこがれをこめて、「むこう」と呼んできました。四方を大海に隔絶された島国、日本の「むこう」の西アジアの国には今もなお、米軍の報復爆撃に逃げまどう無数の老人や子供たちが居ること。そしてその国はシルクロードが栄えた古代、ローマからイスタンブール、そしてサマルカンドへと至る経路の沿道にあり、シルクロードの終点である日本に多くの智慧や文物をもたらしてくれた、同朋の国でもあることを忘れないでいようと思えます。

このご挨拶文を執筆中の十二月中旬、「おじさんの青春日記 その四」所収の「阪神淡路大震災 神戸市立本山第三小学校にて 『ふるさと』が広島市民文芸賞（中国新聞社・広島市文化財団主催）ノンフィクション文学の部に入賞した旨、報道がありました。

新年一月の授賞式で頂ける賞金はこの作品の主人公のひとり、ソプラノ歌手・李浩麗さんの故郷、台湾を襲った「一九九九年台湾中部大地震」の被災地に、そしてNGO組織「国境なき医師団」（日本事務局・東京）を通じて、戦火のもとにあるアフガニスタンの子供たちに寄付したいと考えています。

本年より「おじさんの青春日記」はインターネットホームページからお送り出来るようになりました。クリックひとつで世界中の膨大な量の情報を瞬時に得ることが出来る、スリリングな時代に我々は生きています。

「おじさんの青春日記」ホームページを通じて、同じ時代を生きる者同士が互いに声をかけあうことが出来たら、筆者にとってこれほどの冥利はありません。

「パソコンはどうも」というおじさん、おばさん。

ぜひ一度パソコンの前に坐って、いま我々が生きる時代の最新の息吹に触れてみてください。ようようお願い申し上げます。

今年も、敬愛し、素晴らしい感性をお持ちの方々に『おじさんの青春日記 その6』をお送り出来たことを感謝いたします。
ご健康をお祈り申し上げます。

彼の地に一日も早く平穏な日々が訪れることを祈って。

里古賢司

二 二年（平成一四年）元旦

おじさんの青春日記

その6

おじさんは学生時代の恩師の訃報を新聞の片隅に見つけて、しばし物思いにふけります。

その教授は大学紛争の騒然とした時代のなか、変動の時を共に熱く過ごした同志でもあります。

単位が足りないおじさんが、広島銘酒の一升壺を片手に先生の研究室の扉をおそろおそろ開けた時の話。

開口一番、

「キミ、どこの留置場にいた？ 入るんなら、

署だねえ。」

あそこの親子丼はうまかったねえ

「クラス半数は機動隊の一斉デモ規制にあつて、教授も男子学生も女子学生も仲良く留置場にすし詰めにはされるのは日常茶飯だった時代です。」

太平洋戦争終戦直後。戦地から多くの兵士が家族のもとに生還しました。その時期、日本の人口が一挙に増え出現した「団塊の世代」。

その世代は産院や教室、受験、すべての人生過程、警察の留置場さえ「ぎゅうぎゅう詰め」にされた世代です。火葬場もかあ？！

あの頃のおじさんと同世代、今の大学生は言います。

「ゼンキョートー？ ゼンガクレン？ それって、宗教団体か

なにかあ？ デモって、シヨボい棒きれ持って機動隊とケンカする、アレでしょ？」

「ダサーッ！ 機動隊に勝てるわけないじゃん」

「

こうまで言われておじさんは、日本の青年たちに叫びたくなります。

こらっ、セーネン、

一、女子と道ばたでチユウするのはやめなさい。

二、次々に物を欲しがることをやめなさい。

三、なぜ、本を読もうとしないのか。

四、みんなや自分の未来を考えることはないのか。

五、なにか世の中に言いたいことはないのか。

伝えたい、と思わないのか。

あの頃のおじさんが、「おじさん！」と呼んだ人たちから言われていたと同じ小言を、いま、おじさんは空しく叫ぼうとしています。

青春の感傷を胸に秘め、きょうもがんばる、全国の孤独な

おじさんに贈る、

「おじさんの青春日記 その6」

おじさんの青春日記（その6）

目次

世界一の国旗掲揚台を建てた男

「追録 ハリー・タケオ・モミタ」

新春寄稿

「起て！ 萬國の日本人」

「おじさんの青春日記」在イタリアファンクラブ

勅使裕子

おじさんの青春日記（その6）

世界一の国旗掲揚台を建てた男

「追録

ハリ

ー

・

タ

ケ

オ

・

モ

ミ

タ

」

在 アメリカ合衆国ロサンゼルス
前野 富子様

謹啓。広島慶徳成美様のご紹介で、お便りを差し上げます。
このたび、機会あつて「カリパトリアへの手紙」を出版いたしました。出来上がったばかりのこの本を、あなたに謹んでお送り申し上げます。

一九八六年の夏のさかり。アメリカ合衆国カリフォルニア州の砂漠の町、カリパトリアから「カリパトリアハイスクールバレーボールチーム」の女学生たち十六名が、十七日間にわたつて日本を旅行しました。その旅程のなかで、三泊四日の予定で広島を訪問する、という知らせが入つたのは七月中旬のことでした。一行の日本側受け入れ責任者、中村真由美さんからの協力を依頼する一本の電話がこの出来事の発端でした。

中村さんと私は、原爆の爆心地に近い本川小学校の同窓生。私たちが、この本川小学校に入学した年のちょうど十年前の夏、当時、学校にいた二百十数名の児童の頭上約五百八十メートルで原子爆弾が炸裂しました。奇跡的に生きのびた一人の児童を除いて、ほかのすべての児童は即死の状態でした。

太き骨は先生ならむそのそばに小さき頭の骨あつまれり

正田 篠枝

平和公園にあるこの歌碑がその時の悲劇を何より雄弁に物語っています。

この時、広島市で被爆死した人は十万人とも十五万人ともいわれています。中村さんと私は、この本川小学校で原爆スラムから通学する同級生たちと一緒に机を並べていました。中村さんは結婚後も東京で英語教育の研究を続けるかたわら、民間人同志の色々な国際交流のお手伝いをしています。

広島を訪問する訪問団は、十三才から十八才までの女子生徒十二人、引率の教師、父兄たちが四人、それに東京から一行に随伴する日本人が十三人、総勢二十九人にのぼる訪問団です。

「原爆慰霊碑に参拝したい。広島の高校生たちとバレーボールの親善試合がしたい。多くの広島市民と交流をもちたい」

というのが広島訪問の目的です。東京からの情報によると、カリパトリアの生徒たちは、日本旅行のために一年以上も前から色々なアルバイトをして旅費を蓄えたそうです。その旅行の予算たるや、十七日間の滞在で一人あたり（往復の飛行機代も含めて）三十万円という、びつくりするほど質素な計画なのです。電車の一区間でも歩いて電車賃を節約したい、というほどの緊縮予算。中村さんからは、三泊四日の広島滞在中のすべてのスケジュールについて一任をうけたものの、何から手をつければよいものか私は考えこんでしまいました。

しかし、私は、一万マイルも離れた異国からはるばるやってきて、乏しい旅費を割いて原爆慰霊碑に参拝しようという、彼女たちの心意気がすっかり気に入ってしまいました。

私は友人に次々に電話し、遠来の客を迎えるための十二人からなる「カリパトリアハイスクール歓迎委員会」の結成を呼び掛けました。

上は五十八才から下は二十三才まで。主婦、高校の教師、医師、商社マン、幼稚園の経営者、雑誌の編集者。職業も年令も見事なくらいバラバラの、十二人からなる「歓迎委員会」がたちどころに組織されました。委員長はもちろん言いだしっぺの私です。

委員たちは毎日のように仕事を終えたあと、三々五々、私の事務所が集まってきた議論を重ねました。広島でのスケジュールの策定。移動の方法。ホームステイの依頼。バレーボールの親善試合の手配。資金集めを兼ねたレセプションの企画。十二人の委員たちは数えきれないほどの仕事を手分けして、協力を依頼する趣意書を手に町に散っていきました。

歓迎委員からのホームステイ引受の依頼に対して、ある家庭から
「黒人でないことを条件に、ホームステイを受け入れる」

という趣旨の回答がありました。盛り上がりかけた委員たちの気持ちを重くさせるような、不快な回答でした。アメリカから十六人の訪問団が来広するという知らせを受けて以来、私たちはあわただしく色々な議論をしましたが、来訪者の国籍や肌の色が話題になったことは、この時まで一度もありませんでした。人種、国籍を問わず、私たちにとっては遠来のお客様であり、この人たちにありのままの広島にふれてもらって、無事送り出そうというのが委員たちの素朴な気持ちでした。

「我々日本人とても現代の白人中心の国際社会のなかで、必ずしも正当な扱いをうけているとは言えないと思う」
と憤慨する委員もありました。

ホームステイはなるべく実行委員の家庭に依頼することにして、その申し出はお断りすることになりました。

選挙運動を思わせるような歓迎委員たちの活躍で、お金や品物の寄付の申し出が相次ぎ、委員会の見通しは日に日に明るくなってきました。委員たちはいたるところから戦利品を持ちかえります。形のあるもの、形のないもの。

私の部屋の一角はそれらが小山になりました。
紆余曲折のすえ、歓迎委員会が最終的にアレンジしたスケジュールは次のようなものでした。

八月 七日午後 成田国際空港着

八月十二日 一四時 広島駅着

一五時 平和公園 慰霊碑参拝

一八時 歓迎レセプション 広島ユースホステル泊

十三日 十時

一一時 広島市長を表敬訪問

一二時 広島お好み村で昼食

一七時 広島女子商体育館にて日米親善バレーボール試合

十四日 九時

一六時 宮島観光へ

二二時 廿日市町・原での盆踊り大会へ。

十五日 十時

広島ユースホステル帰着。泊。

八月二十三日 成田国際空港発。帰国

訪問団の広島到着を間近に控えたある日。広島を訪れる訪問者たちについての知識を少しでも持っておきたいと思つて、あらかじめアメリカ側に依頼しておいた書類が送られてきました。

一行のメンバーズリスト。学校の沿革や、カリキュラムが詳しく書かれたハイスクールのガイドブック。カリパトリア市長とカリパトリアハイスクール校長から我々に宛てた、丁寧な感謝と依頼の手紙。カリパトリアの町にあるという塔柱の恐ろしく高いフラッグポール（国旗掲揚台）の絵はがきとともに、このフラッグポールにまつわるエピソードを紹介した二通の英文資料が同封されていました。

*

カリパトリア市は、メキシコ国境に近く、見渡すばかりの砂漠に囲まれた盆地のなかの町である。農業のほかこれといった特別な産業もなく、どこにもあるカリフォルニアのつましい田舎町である。人口は約三千人。すぐとなりにはナイランドという、カリパトリアと同じくらいの規模の町があり、今回来日する生徒たちの何人かは、このナイランドからカリパトリアハイスクールに通学している。

カリパトリアの町が太平洋の海面下百八十四フィート（五十六メートル）、西半球で一番低いところにあることを表わす、高さ百八十四フィートの世界一高いフラッグポール（国旗掲揚台）が町の唯一の自慢である。

一九三〇年頃からこのカリパトリア市のあるインペリアル郡で、タケオ・ハリー・モミタ、シズコ・ヘレンという勤勉で誠実な日本人夫婦がドラッグストアを営んでいた。

一九四一年、日本の真珠湾攻撃で端を発した太平洋戦争によって、夫妻は子供たちと共にアメリカ軍によって日本人隔離キャンプに収容された。一九四二年のことである。

そして、日本が戦争に敗れるまでの三年間、収容所で囚人同様の生活を送ったモミタ一家は、終戦とともに再びこの町に戻ってきた。終戦直後のことで、日本人や日系人に対するカリパトリア市民の反日感情は強く、一家は血のにじむような努力をしてドラッグストアの再開にこぎつけ、子供たちを学校へ通わせ始めた。

年月を経て、アメリカ人の反日感情も徐々に和らぎ、夫妻の息子ミルトンはハイスクールのプレジデント（級長）に選出され、モミタ夫妻もマツカラン・ウォルター法に基づいてアメリカ市民権の復権が認められるようになった。彼らのドラッグストアは、カリパトリア市民の社交の中心地となり、ハリーの妻、シズコ・ヘレンは町の人達が毎朝コーヒーを飲みに来られるよう、毎朝きつかり八時には店を開けた。

やがて、ハリー・モミタは、カリパトリアの商工会議所会頭に任命されるほど市民の信頼を得るようになった。

一九五七年。ロサンゼルスに住む息子のもとを訪れる途中、夫妻の乗った車はハイウェイで暴走車に衝突され、シズコは即死、ハリー・モミタは意識不明のまま病院へかきこまれた。重傷であった。

しばらくして、カリパトリア市のエドワード・H・レイドマーカー市長は、フランクリン・ギャレット市議会議員、ジョン・ビューチャンプ警察署長を伴って、ハリー・モミタの入院先を訪れた。市長レイドマーカーは、モミタ一家が日系人収容所に囚われの身となっていた頃、アメリカ軍の一員として太平洋戦線を転戦していた。そして彼は太平洋戦争末期、日本軍が絶望的な戦闘をくりひろげた硫黄島の戦いにも従軍して凄絶な戦火をくぐりぬけ、日本軍の最期を見届けた一人でもあった。

レイドマーカー、ギャレット、ビューチャンプの三人は、ベッドに横たわるハリーに彼が回復するまでの間、主人を失ったドラッグストアをカリパトリア市民の手によって運営することを申し出た。

「ハリーは困っている。他のアメリカ人市民と同じようにみんなで彼を助けてやろうじゃないか」

というレイドマーカー市長の呼びかけにこたえた多くのカリパトリア市民は、交替でドラッグストアの店頭に立ち、ハリー夫妻に代わって商いを続けた。ハリーのドラッグストアは彼の入院中も多くの市民によって順調に経営され、その収益はハリーの治療費に充てられた。

退院後ハリーはロサンゼルススの仏教寺院に眠る、亡き妻、シズコ・ヘレンに寄せられた多くのカリパトリア市民からの五ドル、十ドル単位の献金（香典）の束を手に、カリパトリア市庁舎を訪れた。そして、彼は、

「このお金を、カリパトリア市民の長年の夢である、世界一高いフラッグポールの建設に役立ててほしい」と、市長に申し出た。

カリパトリア市長、レイドマーカーは大平洋の海面下百八十四フィート（五六メートル）という西半球で最も低い低地にあり、頻繁に冠水被害をもちたすこの土地のハンディキャップを何とか克服したいと考えていた。カリパトリアの町を象徴する海面にまで届くフラッグポールを建設し、市民にこの町に住む誇りを持たせることは、かた時も忘れたことのない彼の夢であった。

ハリー・モミタのこの素晴らしい申し出を報道で知った全米の各地から続々と、世界一高いフラッグポールを建設するための寄金がカリパトリア市長のもとに届けられた。カリパトリア市は百八十四フィートの旗ざおの長さを区分し、その持ち分を表す証明書を発行して寄付者の好意にこたえた。最終的に寄金は、当時の金で一万ドルにもものぼった。

当時、アメリカ合衆国副大統領であったリチャード・M・ニクソンは、かつてアメリカ連邦議会議事堂になびいていたアメリカ合衆国国旗を、このフラッグポールに掲げるようレイドマーカー市長あてに贈呈した。

こうして、深さ十八フィート（五・四メートル）、重さ八万二千ポンド（約三十七トン）の基礎に支えられた、頭部の直径五インチ（十三センチ）、底部の直径二十四インチ（六十一センチ）、重さ一万八千ポンド（約八トン）、五六メートルの高さをもつタワー状特殊スチール製のフラッグポールが完成した。

一九六六年七月四日。カリパトリア市は、高さ百八十四フィートのフラッグポール献立式を挙行した。その夜、スピーカーからアメリカ合衆国歌の流れるなかを、スポットライトを浴びながら星条旗は世界一高いフラッグポールをつたって空に舞上がっていった。

カリパトリア市長レイドマーカー、ハリー・タケオ・モミタをはじめ、カリパトリア市民の積年の夢はこうして実現した。

ヘレン・シズコが命を絶つて三年後のことであった。

このカリパトリアのフラッグポールは、世界一高いだけでなく、「素晴らしき隣人愛」の象徴として、三十年経った今も全米から多くの見学者を集めている。

*

前野 富子様。

カリパトリアの生徒たちは、広島での四日間の日程も無事こなして、一九八六年八月二十三日、アメリカに帰国しました。

彼女たちを広島に迎えた「カリパトリアハイスクール歓迎委員会」十二人のメンバーの奮闘ぶりは、あなたにお見せしたいほどでした。

資金集めのための歓迎レセプションを担当した委員は、会場となったユースホステルの集会室の床が抜けんばかりの参加者を集め、三十万円近い剰余金をひねり出しました。広島の高校生たちとのバレーボールの親善試合は、応援の歓声に包まれて審判の声さえもかき消されるほどでした。炎熱の平和公園で花束を抱えた生徒たちが慰霊碑の前に整然と並んだ情景を、私は一生忘れないと思います。

生徒たちの広島滞在中、私は眠っているときを除いて終日彼女たちと共に過ごしました。その数日は、驚きと、戸惑いの連続でした。彼女たちと過ごした数日は、私にとって真夏の倦怠を吹飛ばす、清新な風に出会ったような数日でした。彼女たちは日本を離れるにあたって、全員が日本旅行の詳細な感想文を残してくれました。

「今回の旅行で一番印象的だったことは、素晴らしい日本の人々のことを知ったことです。信じられないくらい、いい人たちでした。私たちをよるこんで手助けしてくれて、この旅を忘れられないものにして下さった人たちと、もつともつと一緒に過ごしたかったです。こんなに助けて下さって、本当に有難う。心からお礼を言いたいです。私の気持ちはとても言い表せないけれど、こんなにも日本の人々に温かく迎えてもらって、どんなに幸せだったか、きつとわかってくれますよね。私たちの旅を支えて下さって、本当に有難う。きつと誰もそれを忘れないでしょう」

マリア・ドロレス・アルカラ 十八才

「今回の旅行で最も悲しい体験は、広島に落とされた原子爆弾のことを知ったことです。私の望みは、現在もさらに多くの核兵器を開発している科学者のような人たちが原爆資料館を訪れて、広島に原爆が落とされた時の人々と同じ状況に自分自身を置いて考えてみることです。そうしたら、自分たちが開発している、まさに同じ兵器で自分もまた愛する友達や、両親を失うこともあるのだ、と考えられるでしょう。もし、この資料館に来たら、恐らく自分たちのやっていることについてもつと深く考えられるようになるでしょう。原爆はあまりにも多くの罪のない人々を殺したと思います。彼らは、なぜ自分たちが殺されたり、傷つけられたりしたのか知ることさえ出来なかったでしょう。私は核兵器の開発はやめるべきだと思います」

パスクアラ・マルケス 十八才

「何もかも素敵な旅でした。多分広島でのことはいつまでも忘れないでしょう。あそこでは、とてもいろんなことを感じました。忘れられない思い出は、日本人の生きかたです。いつも急いでいて、人ごみをかきわけて、それでいてとてもゆったり静かに見えます。靴をぬぐことは、やはりなじめませんでした。もつと少人数のグループと、もつとゆっくり見る時間が欲しかったです。日本の歴史も勉強しなければ。こんなに素敵な人たちと、もつと話せる時間が欲しかったです」

ダイアナ・ジャクソン 同行した父兄

「日本について一番興味深いことは、日本人の信じがたいような自己修練です。社会が効率よく機能し、清潔に保たれ、またこんなに混雑しているのに犯罪が極めて少ないことなどに感動しました。独身の女性が一人で夜中に、こんな人ごみのなかで百ドルをキャッシュを持って歩いて怖くない、という都市を経験出来たことは私にとって驚くべきことです。私たちアメリカ人が、時に、あまり感謝していないこと、物事をちゃんとわかっていないことを恥ずかしく思うことがあります」

デビー・スー 小学校教師

「平素は経営のことや、数字上のことで頭を傷めている私にとって、無心にカリパトリアの皆さんをお迎えできたことはひとつの救いでした。人間が生きていくなかで、国の違いや人種をこえて相手を思いやり、愛することは人間としてしなければならぬことだと思いましたが、人間は本来、それが出来る力を持つているはずだと思います。忙しいとか、はずかしい、ということももうやめて、この力を表現して、行動に表してみることが必要だと感じています。そういう意味で『カリパトリア歓迎委員会』は、私にとって良いチャンスでした。今の満足感は、私の歴史のなかの、忘れられない一ページになると思います」

原 徹 四十四才 歓迎委員会委員

「八月十三日の午後、カリパトリアハイスクール、広島井口高校、広島女子商高校の三チームでバレーボールの親善試合を行いました。夏休みのさなかのことでしたが、関係者の絶大な支援を戴いて何とか準備が整いました。我々のチームにとってアメリカ人チームとの対戦はもちろん初めての経験でした。生徒たちにとっても今回のようにリラックスして、楽しみながらする試合は今までになかったことでしょう。アメリカの高校生たちはゲームを楽しんでおり、彼女たちの性格も非常に陽気で明るく、見習うべきところが沢山ありました。

試合会場に使った広島女子商体育館のすぐそばに、生徒たちが授業の合間にくつろぐための小さな庭があります。その庭を見守るように石造りの慰霊塔が立っています。昭和二十年八月六日、広島女子商は学徒動員で働いていた三百二十九人の生徒と、九人の教師を原子爆弾で失いました。この夏アメリカ・カリパトリアハイスクールのバレーボールチームを私どもの学園にお迎えしたことは、学園の歴史に新しい一ページを加えることになりました。チャンスがあれば今度は我々がカリパトリアを訪問してみたいものだと思っています」

川野 博正 三十八才 歓迎委員会委員 広島女子商教諭

「パーティーの日、私はいつの間にか受け付け係りになっていたので、ずっと会場のそとで蚊にさされながらお客様が来られるのを待っていました。私はカリパトリアのひとに会ったら、ちゃんと英語で話そう、と考えていたのに、いざとなったら体がちかちかの棒のようになってしまつて何も言えませんでした。バレーの試合の前、書道教室でアメリカの生徒たちに習字を教えるとき、体でしめしたりして一生懸命教えて、わかってくれた時はとてもうれしかったです。試合後わかれるとき、ひとりひとりあくしゅしておわかれしました。なかにはわかれがつかなくて泣いている人もありました。とても感動しました。カリパトリアの人が帰ったあとの体育館はとても静かでした。またぜひきてほしいです」

木村 みどり 十五才 広島女子商生徒

「カリパトリアハイスクール歓迎委員会からの歓迎レセプションの案内状がまわりまわつて私の手もとに届きました。カリパトリアの生徒たちはもちろん、日本人の出席者も初めてお会いする方ばかりでした。その晩、彼女たちとすっかり仲良くなり、委員会からも快くお許し戴いたので、十四日の宮島観光に友人の伊達さんと一緒に同行させて戴くことになりました。宮島の栈橋でいったん解散したあと、ジャクソン一家、ソーチー達と一緒に島内を観光しました。彼女たちは底ぬけに明るく、親子の関係も節度ある友人同志みたいで好感をもちました。日本人の私たちが首をかしげるようなものを、彼女たちはよるこんでおみやげに買いこんでいました。

彼女たちは私よりずっと年下のティーンエイジャーなのに、多くのものを私に与えてくれました。今まで見過ごしてきた日本人の良さも知りました。彼女たちと接することで、わたしはつばさを与えられたような気持ちでした。彼女たちは、私たちの島国根性を正してくれたいと思います。彼女たちはそれぞれ民族、人種が違うのにお互いが助けあって、思いあって

旅行を楽しんでいました。日本人は狭い考え方をすてて、すべての世界に共通するしっかりした世界観を持つべきだと感じました。レセプションの夜、宮島と廿日市での夢のような一日。それは私にとって信じられないような、ドラマチックな出来事でした。得ようとして決して得られない感動を、多くの人のおかげで体験させて頂きました。ありがとう」

栗田 亮子 二十六才 団体職員

私と仲間たちにとって恐らく初めてで最後の経験を、私は出来るだけ詳細な記録に残したいと考えました。カリパトリアからの訪問者たち全員が残してくれた日本の印象記。「歓迎委員会」委員や関係者の感想文。滞在中におこった多くの事件。歓迎行事のために費やされた費用収支の細かな記録。

様々な因縁から広島を訪れた一団の外国人訪問者たちと広島市民との、ひとつの出会いの記録を可能な限り書き残して、我々の次の世代に残したい、と私は思いました。それは歓迎委員会の仲間たちの貴重な時間と労力を奪った、委員長としての最後の仕上げの仕事でもありました。

私は書きなぐるような勢いで「カリパトリアへの手紙」という一編の文章をまとめました。来日した生徒や父兄、それに、多くの外国人の友人にも読んでもらいたいと思って、英文の翻訳もそえて出版することにしました。

「カリパトリアへの手紙」の全文を書き終え、あとがきの筆をおいたのは一九八七年（昭和六十二年）の春のことでした。

こま切れの原稿を東京の友人、宮浦国江さんへ送って翻訳作業を進めていただいて、本文と英文の原稿が確定したのはそれから半年を経たのちのことでした。本の発行人は「カリパトリア歓迎委員会」とすることとなり、頒布は委員全員が引き受けてくれることになりました。

出版のメドがついてからも私は、なぜかカリパトリアの世界一高いフラッグポール建設の端緒となった、ハリー・タケオ・モミタのことが離れませんでした。それは、カリパトリアの生徒たちが広島を訪れたことで偶然知ることとなったハリー・タケオ・モミタという人物に対する興味でした。

今から半世紀も前にアメリカ社会にとけこんで、アメリカ人の心をゆり動かしたという、この一人の日本人の歴史に私は強く興味をひかれました。ユースホステルでのレセプションの席上、弦楽四重奏によるアメリカ国歌演奏の際に、会場に掲げられた星条旗にむかって胸に手をあて、雨だれのような涙を流してアメリカ国歌を歌った生徒のひとり、ロリスの姿がフラッグポールの絵はがきにオーバーラップします。

今から三十年前、カリパトリアの人たちからの献身的な支援にこたえて、アメリカ合衆国国旗を戴く世界一高いフラッグポールを建設した日本人、ハリー・タケオ・モミタのストーリーは、「カリパトリア歓迎委員会」のメンバーをどれほど勇気づけたことでしょう。

広島を訪れた一行にハリー・タケオ・モミタの消息をたずねても、全員が「まったく知らない」ということでした。数十年も前にさかのぼる町の歴史を、若い彼らが知らないのは当然のことかもしれません。

カリフォルニアの片田舎に、どういう歴史をたどってこのモミタ一家は根をおろしたのだろうか。兄弟は 子供たちは そして彼自身はいま？

せめて日本の出身地だけでもわかれば、ハリー・タケオ・モミタを知るゆかりの人にでもめぐり会えるかもしれない。

一九八七年（昭和六十二年）の晩秋。商用で東京へ出張した私は、麻布の「外務省外交史料館」を訪れました。日本国が今日まで営々と刻んできた日本外交の歴史がここに凝縮されている、といった感じのいかにも落ち着いたたたずまいの建物です。玄関には歴代の外務大臣の写真が掲げられ、展示室には日本の外交を決定した重要な事物が展示してあります。私は係りの人に趣旨を話し、日本に残っているかも知れないハリー・タケオ・モミタに関する情報の検索方法を相談しました。

カリパトリアからの訪問団を広島に迎えたことがきっかけで、私は思いがけない迷路のなかに入りこむことになりました。モミタに関する私の持つ情報はあまりにも少なく、「一九三三年頃カリパトリアの町でドラッグストアを営んでいた」という程度の知識しかありません。

何回かのやりとりののち、係りの人が無造作に積み上げた机一杯の資料のなかから「昭和六年十二月末日現在 『海外本邦實業者調』 外務省通商局」という古ぼけた一冊の冊子を見つけました。表紙には「機密」の印判が打つてあります。

昭和六年当時、日本国外に居住する日本人実業家のリストです。私は胸躍る思いでページをめくりました。

アメリカ合衆国・ロサンゼルス・ブローレー（帝国平原インペリアルバレー日本人会会報）の項目のなかに、めざすそれを見つけました。

「榎田武雄」。ドラッグストアを経営しています。この人に間違いない。

私はこの時初めて、日本に残る信頼性の高い資料を発見したのでした。

しかし、そのリストには店の称号、業種、資本の額、取り引き高の簡単な記載があるだけで、めざす「榎田武雄」個人に関する記述はなく、出身地や本籍地の記載ももちろんありません。

係りの人にさらにたずねました。しばらく待たされたのち、

「出身地を含めた詳しい事実を知るためには、明治以降、外務省から発給されたすべての旅券（パスポート）の発給控えのなかから、該当者の名前を探し出すしか方法はないでしょう。しかしそれはとてつもなく大変な作業になります」

という回答。

明治初頭から現代まで、あらゆる目的で海外に渡つたすべての日本人の旅券控えが外交史料館には保存されています。明治時代だけでも膨大な数の日本人が海外に渡っており、そのほとんどは「移民」扱いとなっています。

日本から海外への本格的な集団移民は、日本とハワイ王国（当時）との間に締結された「渡航約定書」および「渡航条約」に基づいて、明治十八年（一八八五年）一月、ハワイへの官約移民者二二二名が渡航したときが最初。以後、アメリカ本土への移民や、ハワイを経由してアメリカ大陸へ渡るものも徐々に増えていきました。当時のハワイへの移民者は、さとうきび耕地で農夫として苛酷な農業労働に従事するため農民出身者がほとんどで、日本では土地を持たない小作農や土地所有の少ない自作農がほとんどでした。当時の日本の日本の賃金の五倍から十倍というハワイやアメリカの高賃金に魅せられて、日本では過剰労働力となった多くの若者が海を渡りました。海外に渡つた移民者は支給される賃金を細々と蓄えて、故郷に送金しました。たとえば、明治二十四年頃、広島から海外へ渡つた移民者から故郷に送られる年間の送金総額は、当時の広島県予算の三分の二にも匹敵する莫大なものでした。

私は係りの人が倉庫から持ち出してくれた、明治時代の「海外旅券下付表」の一冊をめくってみました。和紙に米つぶのように細かな筆文字で、旅券番号、氏名、族称、身分、本籍地、年齢、保証人氏名、旅行地先、旅行目的、下付月日が記載されています。しかし、それは県別に分類されてはあるものの、氏名の索引など勿論なく、その年の三ヶ月分（日本全県）の分量だけで厚さ三十センチにもなる資料です。一年分を積上げると一メートル以上、

十年間で。

私は目のくらむような思いでした。

私は史料館で終日過ごし、

「『海外本邦實業者調』のなかでモミタ・タケオの名前を確認出来ただけでも収穫

と自分に言い聞かせて、閉館時間の迫った史料館を退出しました。

モミタ・タケオの細かな記録を入手するには膨大な量の「海外旅券下付表」を一枚ずつめくって「榎田武雄」の名前を探し出すしかない、ということは解りました。しかし、対象となる「海外旅券下付表」は少なく見積もっても二十年分はありそうです。積み上げれば三十メートル近い、気の遠くなるような作業です。

東京にいつまでも個人的な用件でとどまっているわけにはいきません。

「もついいんじゃない？」

と友達の声。

前野 富子様。

ハリー・タケオ・モミタこと榎田武雄の名前を膨大な量の「海外旅券下付表」のなかから探し出すために、私は東京で三人の学生アルバイトを雇うことにしました。

「こうなったら、とことん

」

という構えです。

私は生まれた時から虚弱で、成長するまで周囲をハラハラさせどおしでした。体力と根気の必要な勉強も苦手でした。学生時代はたいして勉強もせず、寝ころがって好きな本を読んだり、友達を何十人も集めては騒いでばかりいました。

しかし、社会人になってから私はあの頃読みふけた本のエッセンスや、友達と徒党を組んで何やらやったあげく得たことが人間の営みのなかでは必要なことがある、と気づくことがありました。

と同時に、二十代で経営者になってしまった私は、しばらく経ったのちに、「思いを続けること」の大切さを知りました。「思いを続けること」は、ある時は自分の勇気の源泉でもありました。

自分にとって大切と信じる思いを抱きつづけることで、私は思いがけないような人達と出会い、人生の局面を変える経験を幾度も重ねました。

カリフォルニアの辺境の地で「世界一のフラッグポール」建設に示したハリー・タケオ・モミタの情熱と実行力。彼のたどった歴史を自分の手でさらに解明してゆくことで、私は自分の後半生の指針を探ろうとしたのかも知れませんが。

学生アルバイトの責任者は中央大学文学部に通学する、横溝しずかさん。冷静で、論理と想像の能力を兼ね備えた頼もしい女子大生です。あとの二人は、藤宮礼子さん、上野ゆかりさん。

私が彼女たちに与えた任務は、

一、「外務省外交史料館」に保存されている「海外旅券下付表」を徹底検索して、日本人、榎田武雄の名前をできるだけ合理的な方法で探し出し、出身地（本籍地）を特定すること。

二、抛りどころとなる資料は、英文雑誌「タイム」の記事コピーと、カリパトリア市役所書記の執筆したというレポートの写し。以上二点しかないこと。

彼女たちは私が渡した資料を分析推理し、いくつかの仮説をたて、大学の授業の合間をぬって麻布の外務省外交史料館に通うことになりました。

彼女たちは、

「今までやったバイトの中で一番興味深く、ミステリアスなアルバイトです」

と口を揃えました。
私は横溝さんとの打合せを終え、すべての作業を彼女たちに託して東京をあとにしました。

それからしばらく経った十一月二日午後、東京の横溝さんからの吉報がフアクシミリで私の部屋に入りました。一九〇八年（明治四十一年）十二月の海外旅券下付表のなかから「榎田武雄」の名前を見つけ出したのです。
そして、驚いたことに受信紙に書かれた本籍地は、

広島県安芸郡府中村（現・府中町）

とあります。

私は目を疑いながら、何度もその受信紙を読み返しました。

横溝さんからの第一報には海外旅券下付表の写しと共に、本人と信じるに足る理由が明快に書き添えてありました。

- 一、一九三三年にドラッグストアが軌道に乗っているということは、三十二才の時であり年令的に一致する。
- 二、「榎田」はモミタと読むことは確認済み（漢和事典コピー添付）
- 三、行き先が北米合衆国であり、「移民」扱いとなっている。
- 四、「榎田」という名前が他にそうあるとも思えない。名前も一致する。

彼女たちは外交史料館へ通い初めてわずか三日目に、膨大な史料のなかから「榎田武雄もみたたけお」の名前を探し出しました。探し求めていたものは、私のすぐ近くにあります。カリパトリアのハリー・タケオ・モミタこと榎田武雄は広島県の生まれ。私と同県人だったのです。

カリパトリアの生徒たちがアメリカに帰国して、一年二ヶ月経ってからのことでした。横溝さんたちの成果は、綿密な分析と推理の勝利だけとは言いきれない、何かがあるように思えてなりませんでした。

私はハリー・タケオ・モミタの魂が百年近い歳月を経たのち、太平洋をこえて広島にもどってきたような思いに浸りました。

東京の横溝さんから「海外旅券下付表」の謄本が郵送されてきました。広島県の官用箋に毛筆で細かく事実が記載されています。

明治三十四年五月二十一日

榎田牧太郎（当時三十一才）が商業の目的で単身、北米合衆国へ渡航。

明治四十一年五月八日

長男 英雄（当時十三才）

次男 覚雄（当時十一才）に旅券下付。

明治四十一年十二月二十三日

牧太郎 妻 アサ（当時三十二才）

三男 政雄（当時九才）

四男 武雄（当時七才）に旅券下付

楢田一家は三次にわたって旅券の交付を受け、太平洋を渡っていることが読み取れます。三十一才の楢田牧太郎は夢を移民船に託して単身太平洋を渡り、外国人社会のなかで日本に残る家族を呼び寄せるために身を粉にして働いたに違いありません。

七年後。十三才の英雄、十一才の覚雄に旅券が交付されています。兄弟は二人きりで太平洋の荒波を乗り越えたのでしょうか。

同年十二月。牧太郎の妻、アサが三男の政雄（九才）と、四男の武雄（七才）をともなつて夫の待つ未知の国へと旅立っています。幼い子の手をひいて外航船のタラップをのぼるアサの情景が目の前に浮かびます。

こうして、楢田家のルーツは広島にあったことが判明しました。

府中町といえば私の家から車で三十分の距離。外交史料館での調べで、モミタの出身地がたとえ北海道であっても、九州であったとしても、これから先何年かかると、日本に残っているであろうモミタの足跡をたどる気でした。私にとつて、それは本当に幸運なことでした。目と鼻の先にモミタの影が立っていて、今にもそれは私の手のなかに入りそうでした。府中町を中心に電話帳をかたづけしから繰ってみました。しかし「楢田」という姓はどこにもありません。

府中町役場の戸籍課に趣旨を相談しました。当然のことながら、「明治の頃といえども、他人の戸籍をのぞくことは許されない」と

というのが役場の見解でした。

やがて昭和六十二年は暮れて、正月を迎えました。

新年になってから、私は間近に迫る決算の準備に追われました。それに前の年に開発した新製品の量産も目前に迫っています。

モミタのことはしばらくの間、私の頭のなかのひだにかくれていました。

前野 富子様。

年がかわつて二月の末。私は地元の中国新聞に「たずね人」の新聞広告を出すことにしました。

中国地方全域に配布され、発行部数は六十六万部というこの地方最大の日刊新聞です。最も成功率の高いであろう日曜日朝刊に掲載、と指定しました。

たった一本の電話がありました。

その電話の主が、あなたとあなたのお兄様であるモミタ・タケオの母方のいところにあたる、慶徳成美氏でした。

やっと、ハリー・タケオ・モミタの後ろ髪をつかまえました。

一週間後の日曜日。府中町の慶徳氏のご自宅をお訪ねしました。

春の到来を上げる白いモクレンの花が、暖かい日差しの中かに浮かんでいます。

慶徳氏は七十八才。大手の寝具リネンサービス会社を経営する、現役の経営者です。身長一七五センチをこえる偉丈夫。数知れない人の誕生と臨終を見てきたであろう、両眼の落ち着きと、隠された教養の深さを感じる方でした。

慶徳氏は私との思いがけない出会いをいたく喜んでくださり、話の最中にもつつすらと涙さえ見ることがありました。

「モミタ・タケオをふたたび世に出してもらった」とおっしゃるのです。

慶徳氏は五十年前のことをまるで昨日のことのように話して下さいました。

慶徳氏は十数年前口サンゼルスへ渡り、あなたやお兄様の榎田武雄氏にもお会いになったこと。そして、残念なことに榎田武雄氏はすでに故人になられたことを知りました。「眼光は鋭く、明治人の気骨をたくわえた古武士のような人でした。我々よりもっと日本人らしい気概と誇りを感じさせる人でした」

慶徳氏は目を細め、遠くを見るように、榎田武雄氏の人柄を淡々と語ってくださいました。

榎田家は最後の日本生まれである武雄のあとに、アメリカで三重子、朝雄、そして末娘であるあなた（富子）が生まれました。あなたは九州出身の弁護士、前野安夫氏とご結婚され、今はお孫さんに囲まれて幸福な余生を送っておられることを知りました。

前野 富子様。

私は一九八六年の夏に、偶然、あなたのお兄様ハリー・タケオ・モミタの存在を知りました。あのカリパトリアの町のフラッグポールとお兄様のエピソードは、いままで日本人はまったく知ることなく過ごしてきました。そして、あなた方一家のルーツが広島であることを驚きとともに知りました。

一九六一年七月、フラッグポール献立式の日。ポールをつたって空に舞上がる星条旗を見上げながら、モミタ・タケオの脳裏には幼い日の故郷、広島的情景が浮かんだかもしれない。本当はモミタはあのフラッグポールに、星条旗とともに日章旗を掲げたかったかもしれない。

あなたのお父上、牧太郎氏が新天地での職を求め、移民船に乗って日本の港を出帆して十八年の歳月が流れました。その後、日本は世界を相手に戦争を続け、あなた方は日本人であるがゆえに強制収容所に囚われ、広島と長崎の無辜の市民の頭上には原子爆弾が投下されました。

敗戦後四十四年を経て、日本は世界一の経済大国と呼ばれるまでによりがえりました。十八年前のあなたのお父上がそうであったように、開発途上の国々からは人々が続々と職を求めて日本にやってきました。しかし、国際化を叫ぶ我々日本人が、かつてタケオ・モミタ一家を迎え入れ、温かく支えてくれたカリパトリアの市民のように近隣諸国からの人々を受け入れているとはとても思えないのが今の日本の状況です。

私は、歴史の大きなうねりのなかでの、人の連綿たる出会いの連鎖をこのたびほど身近に感じたことはありません。国境を超えた、人々の自由な往来と交流、そして惜しみなく相手に与えようとする友情こそが、平和の原点ではないか、と感じています。

きょうあなたに、こうして手紙とともに完成したばかりの本をお送りすることで、私の長い仕事はひとつの区切りを迎えました。いま思えば楽しい、充実した二年間でした。

機会があれば、近い将来カリフォルニアを訪問したいと思っています。タケオ、シズコ夫妻の眠るお墓にお参りし、我々の同胞を温かく包んでくださったカリパトリア市民の象徴であるフラッグポールに心からの敬礼を捧げることが出来たら、と思っています。

突然のお便り、さぞかし驚かれたことと思います。

慶徳氏からあなたのお体の不調をお聞きしました。どうか、ご養生専一にされますよう、はるか広島からお祈り申し上げます。

敬 具

前野 富子様

里吉 賢司

了

追記

曲折ののちやつとめぐり会えることの出来た、慶徳成美氏は一九九九年二月九日、肺臓癌のため逝去されました。

氏に出会うことがなかったら、おそらくこの作品を執筆する機会を永久に失うことになったと思います。余りにもはかない出会いでした。

かけがえのない歴史の証人をまた一人失った痛恨の思い、しきりです。享年七九歳。謹んで故 慶徳成美様のご冥福をお祈り申し上げます。

この作品は一九九九年 財団法人広島市文化新興事業団主催「文芸作品募集事業 ノンフィクション文学の部」で一席を受賞した作品に新たに加筆したものです。

おじさんの青春日記 ～その6～

特別寄稿

「起て！ 萬國の日本人」

「おじさんの青春日記」在イタリアファンクラブ

勅使 裕子

勅使 裕子（てっし ゆうこ）

略歴
ローマ「スタジオオクレアート」代表。日本企業とイタリア企業の橋渡し役として各種マーケット情報の収集、調査、通訳等に従事。日本経済新聞社組織維欄記事担当や美術誌「美術画報」に「イタリア式芸術鑑賞紀行」を連載。岐阜県出身。イタリア・ローマ在住。

年越し蕎麦を食べて、除夜の鐘を突き、元日になったら着物を着てやっとお正月気分って
いう私のお正月に、数年前から加わったのが『おじさんの青春日記』。
これを読まないで、なんだか物足りないお正月。

今年は初めて日本に帰国せず、お正月はナポリで噂の花火を体験してきました。着物は着
たけどやっぱり日本じゃありません。お蕎麦のかわりにパスタを食べ、情緒ある除夜の鐘の
かわりに、まるで爆撃にあっているかのようなナポリ中に轟く想像を絶する花火。
でも、イタリアのお正月はお正月らしさに欠け、何だか物足りないぞ。と思ってい
待ちに待った『おじさんの青春日記』がはるばる日本からご到着。
もはや私の新年には欠かせない『おじさんの青春日記』なのです。

『おじさんが元気がない。おじさんが元気がないから日本が元気がない。』

グダグダぬかす嫁は返品しよう。ナマイキな子娘は張りたおせ。

起て、萬國のおじさんたち。愚痴と評論はもうやめて、

明日から小さなクーデターを始めよう。』

* 「おじさんの青春日記 その2」のプロローグ

を引用させていただきました。

元気のあり過ぎるおじさんばかりの国、イタリアで生活を始めて6年目。
ホントにこの国のおじさんたちは元気あり過ぎ〜って思うことしばしば。

日本のおじさんにも頑張ってクーデターを始めて欲しい。

頑張って〜！萬國のおじさんたち！と地球の裏側からエールを送っているわたくし、実は
イタリアで密かにクーデターを実行しているのですが、それは。

日本人はイタリア人になめられている！と私は思っています。
勿論、礼儀正しい、といったポジティブな印象もあります。

でも、ブランドショップでの長蛇の列とか短時間で写真だけを撮りまくる旅行っていうの
が日本人のイメージ、というのも事実。

確かに長蛇の列はあるし、観光バスから降りて写真を撮って、バスに戻る、っていうスタ
イルも定番ではあるけれど、みんながみんなそうじゃない。

私は単独ではあるけれど、伊国にて『日本人をなめるなよ！』クーデターを実行してい
るのです。

勝手に『日本人イメージ向上委員会』と名付け、唯一のメンバーである私はもちろん主宰
でもあるので、日夜クーデターに燃えているのであります。

だから、私は「おじさん」じゃないけど、前述のプロローグは他人ごとではないのです。

私はローマに住んでいますが、ある時ミラノのマルペンサ空港からほんのちよっと、とい
う街の美術館に取材に行ったときのこと。

空港からタクシーに乗りました。タクシーの運転手は道を知らず、途中で何度も道を尋ね
ながら小さな街をグルグル。

「ここ、さつきも通ったぞ。」と思うこと一度や二度ならず。

あとで尋ねてみたら一分もあれば充分、という距離を三十分以上も要し、挙げ句の果て
には、ローマの空港から中心地までくらいのタクシー代を堂々と請求してきたとんでもない
運転手。

（「おじさんの青春日記 その5」新世紀特別号の佐々岡運転手さんとは大違い！！）
なぜなら、彼らは日本人をナメているんです。

こうなると『日本人イメージ向上委員会』主宰としては放ってはおけません。

「冗談やめてよっ。半分以上は無駄な道のりだったでしょ？
どうしてそれを堂々と請求してくるの？」

日本人がみんな、言われたままに払うと思っただら大間違い。
納得いかないけど、半額だったら払うけど、それ以上は払わないからねっ！
日本人をナメるんじゃないっつー！！」

と、通常は大和撫子であるはずのわたくしが、美術館の前で譲歩せず頑張っておりまし
た。

そこへ二人の美術館員がご到着。

事情を説明したら、そのうち一人が、まあ〜！ とんでもないことをっ！

もおおお、許せ〜ん！

とりあえずタクシーの運転手とは一悶着も二悶着もした後、タクシーのなかで控えた運転
手ナンバーを読み上げ、車のナンバーも控えて、

「ローマに戻ったら、あなたの所属するタクシー会社に連絡するから、
楽しみにしててね〜」

とギリギリ譲歩の料金を支払い、頭に血が上りながらもその場は納まりました。

さて、残る一人のとてもない美術館員がのたもつた事とは！

「あなた、日本人なんでしょ？ いいじゃない、そのくらい払えば。

グッチやプラダで払ってる金額からしたら、微々たるもんでしょ？

日本人って、チビでスタイル悪いくせに、私達イタリア人が買いに行っても

残ってないくらい買い漁ってるじゃない。似合いもしないのに！

あなたのその服もプラダじゃない？」

とおおお、許せ〜ん！！ 私は『日本人イメージ向上委員会』主宰！

「残念ながら、イタリアには多くの無知な方々がいらっしやいます。

私はイタリアは大好きですけれど、

そんな無知な方にお目にかかるとても残念に思います。

日本人はみんな同じ、と思っ込んでおられるお気の毒な方々です。

この服はグッチでもプラダでもないですし、少なくとも私は

お財布ひとつ持っておりません。でも、日本人ですけれど。

それにしてもこの服がプラダ？ ご冗談でしょう。

これはフランス製で、プラダじゃないんです、残念ながら。

ごめんなさいね。あなたの思い込みの日本人イメージと違って「

とニッコリしてみました。

すると、途端に頭に血が上ったのか、まさに、キョ〜ッ！っていう顔をしてどこかへ行っ

てしまいました。

こんな時『日本人イメージ向上委員会』主宰としては、お役目果たした〜、という満足感

を得ます。その後の取材？ 正直言って心配しました。

でも、もう一人の美術館員・エリザベッタさんが、

「あなた日本人だけど、ちょっと変わってるんじゃない？」

って、笑いながら本当に親切に取材にご協力いただき、帰りは

「タクシーでみっともないイタリアを見せてしまっつて、恥ずかしいよね。

空港まで送るからどうぞ乗っつて」

と空港まで送っつて頂き取材は無事に終了しました。

今でも彼女から展覧会の案内状が届きますが、
「仕事でミラノに来る時には連絡してね。ピザでも食べましょう。」

帰りはホテルまで送るから、心配しないで」というようなメモが添えてあります。

こんな時やっぱり、『日本人イメージ向上委員会』主宰としては、お礼を電話や葉書で伝えるように心がけています。

「青雲の志」（参照 「おじさんの青春日記」新世紀特別号・特別付録）など、笑うに笑えない現実も目にしたりしますが、さすがにこればかりはクーデターの起こしようもなく。

でも、私は萬國のヤマトナデシコ！ 伊国にて日本の伝統的な文化の急速な変化に心を傷めておりますが、『大和の国』の『おじさんの青春日記』は私のそばにいて、私の傷心を和らげてくれています。

今年の『飛鳥 初詣の旅』に参加出来なくって、本当に残念です。

私も、今度日本に帰国する際には、是非、斑鳩の里めぐりを計画しなければ！
チャオ！

了